

「加齢配慮」意識調査を実施／高齢化時代における住まいのあり方探る 高まる「加齢配慮住宅」への願望

1993年4月2日

株式会社住環境研究所

社長 丸野 和也

調査の目的／背景

住環境研究所は、'90年6月に外部の有識者・オピニオンリーダーを含めた小委員会組織（15名）で「高齢化社会における住生活研究会（略称・高住研）」を発足、継続的に、高齢化時代と住まいの関係、加齢配慮住宅のあり方などにつき研究を重ねています。

今回の意識調査は、——家を建てる時に建主がどの程度の加齢配慮をするか、——上記研究会で具体的に提示した加齢配慮住宅（間取り、設備仕様、考え方）に対して現実的に住まい手がどのような反応・評価をするかなどについて研究・分析することを目的に実施しました。

調査は、首都圏・近畿圏の総合住宅展示場来場者を対象に、'93年2月20日にメールアンケートとして発送し、3月5日までに回収しました。回収率は、746件の発送数に対し有効回答票600件を得て80.4%と極めて高いものとなり、この問題における関心度の高さが実証されています。

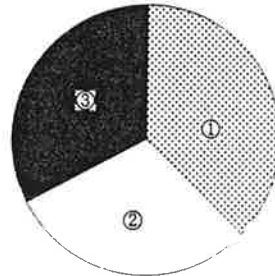
意識調査結果

【希望する居住期間にみる住宅観】良い住まいに長く住む“終の住処”観が主流に

住宅を建てるにあたって希望する居住期間についてたずねたところ、短期間で建て替えや住み替える考え方を持つ層（36.7%）よりも、次の世代まで使える住宅にしたいという考え方を持つ層（62.0%）が倍近くいます。住宅そのものの耐久性能が問われているわけですが、人の高齢化とともに住まいも“良い住まいに長く住む”ということで“長寿化”が要請されています。孫の代まで継承できる“終（つい）の住処”として「加齢配慮住宅」にしておきたいという住宅観が主流になってきました。

Q. 居住期間について、次のどの考え方に近いですか。（○は1つ）

1. 自分の代にもう一度建て替えや住み替えをしたい
（36.7%：217名）
2. 少なくとも自分の代まではその家に住みたい
（29.6%：175名）
3. 次の世代まで使える家にしたい（32.4%：192名）
4. その他（1.2%）



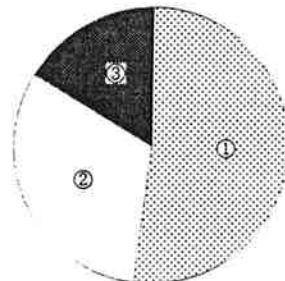
【加齢配慮意識】将来のために配慮しておきたいが83.4%

家を建てる際、自分や配偶者がだんだん年をとって身体機能が多少低下した時のために住宅に何らかの配慮をしておくことについての考え方を聞いたところ、「多少お金がかかっても家を建てる際に配慮しておく」51.7%、「配慮しておくべきと思うが、具体的な費用がわからないので何とも言えない」31.7%、「その時になってみないとわからないので、当面の生活に合う住宅にする」16.6%という結果が出ました。

加齢配慮については、83.4%の人が事前の配慮を考えていますが、そのうち31.7%の人が具体的な内容や費用について知識の面で不安と回答しています。この点については、後添の参考資料に紹介のフリー・アンサーでも住宅メーカーに対する要望として挙げられています。

Q. 家を建てる際、自分や配偶者がだんだん年をとって身体機能が多少低下した時のために、住宅に何らかの配慮をしておくことについて、どのようにお考えですか。お考えに近いものを1つお選びください。

1. 将来のためには多少お金がかかっても、家を建てる時に配慮しておく（51.7%：305名）
2. 将来のためには予め配慮をしておくべきだと思うが、具体的な内容や費用がわからないので何とも言えない（31.7%：187名）
3. その時になってみないとわからないので、当面の生活に合う住宅にする（16.6%：98名）



〔加齢配慮の実施状況〕 建築時に配慮したが6割弱、加齢配慮は現実的課題として定着

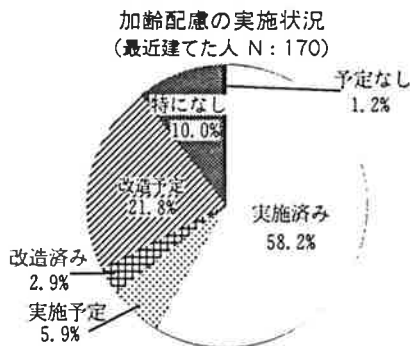
具体的に家を建てるにあたって、将来に備え配慮したかどうかについて聞いてみました。「建築時に実施した」は58.2%、「必要になった時に改造した」5.0%、「特にしなかった」10.0%で、建築時に実施した人が6割弱あり、この数字はかなり高いもので、加齢配慮は決して新しい考え方ではなく現実的課題になっているようです。

また、これから建築する人においても、「建築時に実施したい」50.4%、「必要な時に改造したい」20.5%、「特に考えていない」2.1%で、建築時に加齢配慮したい層が多く、関心の高さがうかがわれます。

Q. あなたは家を建てるにあたって、自分たちの将来に備えて何か住宅に配慮しました（します）か。

1. 建築時に実施した	(58.2% : 99名)
2. 建築時に実施したい	(50.4% : 170名)
3. 必要になった時に改造した	(5.0% : 17名)
4. 必要になった時に改造したい	(20.5% : 69名)
5. 特にしなかった	(10.0% : 17名)
6. 特に考えていない	(2.1% : 7名)

(※不明及び無効票を除き上記分析表の母数数値は建てた人総数：170票、これから建てる人総数337票で算出しました。)



〔加齢配慮の具体的内容〕 ニーズの高いものは、段差の解消、手すりの設置、廊下幅を広く、
寝室の近くにトイレ・浴室を配置など

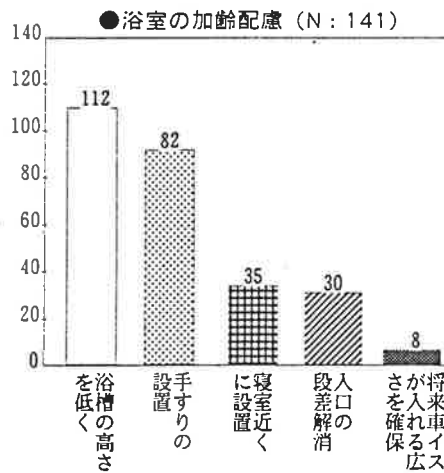
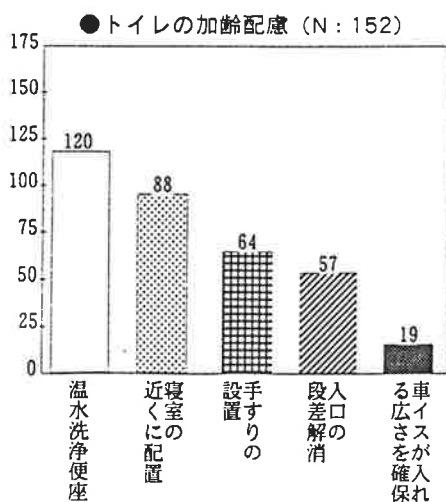
次に、住宅を構成する部屋、部位別に加齢配慮の具体的内容を聞いてみました。その結果は、下のグラフの通りです。実際に建築時に加齢配慮を実施した人の調査結果をみますと

トイレで実施した内容は、トップが「温水洗浄便座」78.9%、次いで「寝室の近くに配置」57.9%、「手すりの設置」42.1%、「入口の段差解消」37.5%、「将来車イスが入れる広さ確保」12.5%。

浴室トップは「浴槽の高さを低く」79.4%、以下「手すりの設置」58.2%、「入口の段差解消」21.3%、「寝室の近くに配置」24.8%、「将来車イスが入れる広さ確保」5.7%と続いています。(いずれも複数回答)

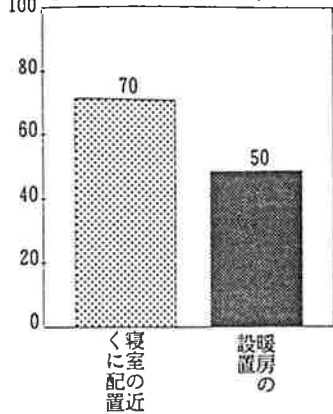
洗面の要望は「寝室の近くに配置」が一番多く、玄関では「手すりの設置」、廊下については「車イスの通れる幅を確保」、また階段については「手すりの設置」を1位に挙げています。その他、家全体にかかわることとしてホームエレベーターを挙げている人もいます。

建築後の「改造」について分析すると、トイレを温水洗浄便座にするとか階段に手すりをつけるといった比較的簡単なものに限定されているようです。今回調査で要望の高かった床段差の解消、車イスの通れる廊下幅確保、寝室の近くにトイレ・浴室を配置するなどの大改造をとまなうものは、費用がかかることを理由に実現率が低くなっています。

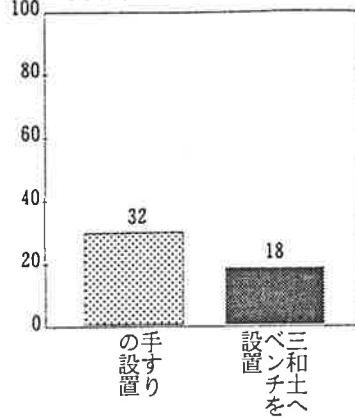


※次頁へつづく

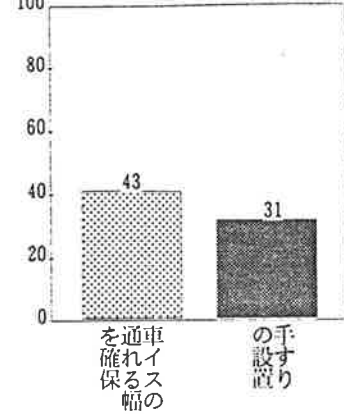
●洗面所に加齢配慮 (N: 107)



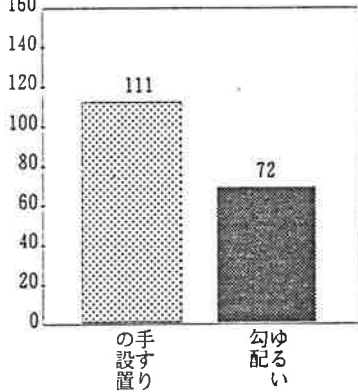
●玄関に加齢配慮 (N: 71)



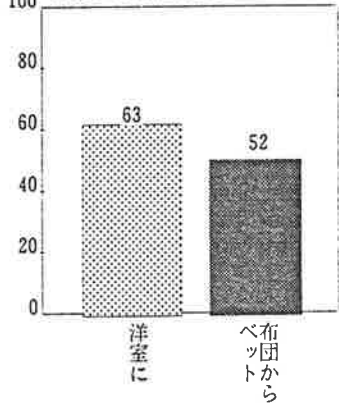
●廊下に加齢配慮 (N: 74)



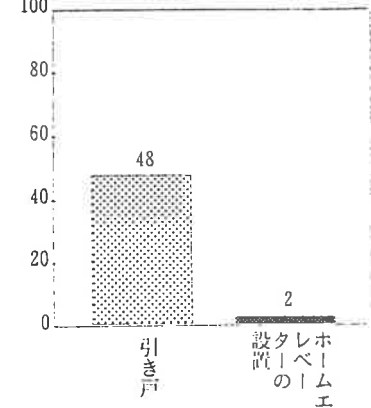
●階段に加齢配慮 (N: 141)



●寝室に加齢配慮 (N: 105)



●その他の加齢配慮 (N: 71)



[加齢配慮設計に対する評価] 間取り・室内仕様で加齢配慮プランがさらに明確に

間取りについて加齢配慮の当研究所の考え方を提示し、5段階評価（非常にそう思う5点、ややそう思う4点、どちらとも言えない3点、あまりそう思わない2点、全くそう思わない1点）で聞いてみました。

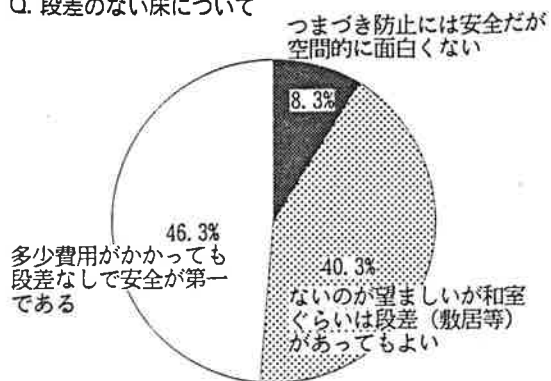
平均点が高いのは、「トイレは主寝室の近くに配置する」(4.5点)、「浴室は多少費用がかかっても、入口を広くして段差をなくす、手すりをつける、浴槽のまたぎを低くする」(4.4点)、「食事、睡眠、入浴、排泄を行なう空間は同一階に配置する」(4.2点)、「将来車イスの通れる通路幅にしておく」(3.8点)などでした。

Q. 間取り等について、あなたのお考えに近いところに○をつけてください。
表内数字は%

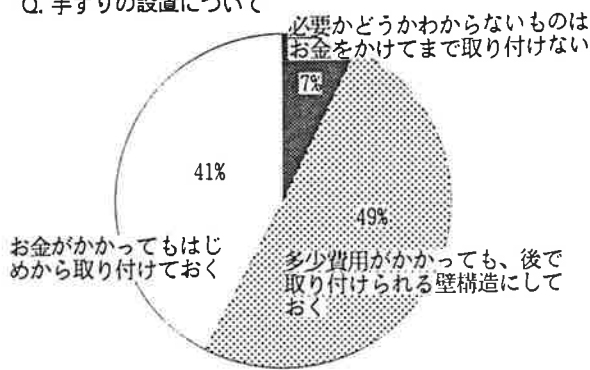
		非常に そう 思う (+5)	やや そう 思う (+4)	どちら とも 言え ない (+3)	あ ま り そ う 思 わ な い (+2)	全 く そ う 思 わ な い (+1)	(平均点)
「食事」・「睡眠」・「入浴」・「排泄」を行なう空間は同一階に配置する		53.5	23.7	12.3	9.4	1.3	4.2
トイレ	主寝室の近くに配置する	61.0	31.6	3.9	3.4	0.2	4.5
	主寝室から直接入れるように配置する	16.7	25.7	23.0	26.1	8.4	3.2
浴室	主寝室の近くに配置する	25.6	32.9	20.2	17.4	3.9	3.6
	主寝室から直接入れるように配置する	8.3	14.6	28.5	33.0	15.6	2.7
	多少費用がかかっても以下のような配慮をしておく 入口を広くして段差をなくす 手すりをつける 浴槽のまたぎを低くする	54.3	34.0	7.8	3.6	0.3	4.4
床面積はとるが、将来車イスの通れる通路幅（約90cm以上）にしておく		31.7	35.8	20.0	10.6	1.9	3.8

室内仕様について、加齢配慮の上で「段差のない床」と「手すりの設置」について必要度を聞いてみました。床「段差」については、かなり抵抗があると予想していましたが、多少費用がかかっても安全第一とする積極的支持層が46.3%、段差は本来ない方がよいが和室ぐらいいはあってもよいとする消極的支持層が40.3%とあわせて段差のない住宅に対する理解と期待は86.6%と予想外に大きいものでした。“手すりの設置”については、多少費用がかかっても後で取り付けられる壁構造にしておく(49%)、はじめから取り付けておく(41%)と合わせて90%の人が必要度が高いと評価しています。

Q. 段差のない床について



Q. 手すりの設置について



〔予算別優先順位〕 食器洗い機よりも段差のない床を

特に加齢配慮に限定しないで予算別の仕様で、優先的にどれを選ぶかにより、加齢配慮ニーズを探りました。

ケース1は仮に3~5万円の予算でどの仕様を優先して選ぶかとした場合です。トップは「トイレと浴室の手すり」、次いで「台所床下収納」、「普通の洗面台を洗髪シャワー付きに」、「カーテンレールにボックスを設置」の順。以下、ケース2は予算7万円で1位は「操作しやすい大きなスイッチ」、ケース3は費用15万円で1位は「段差のない床」、ケース4は費用30万円で1位は「普通の浴室を安全配慮浴室に」と、いずれのケースでも「加齢配慮」の仕様を求めるニーズが強いことがうかがえます。食器洗い機よりも、段差のない床を、ホームサウナよりも安全配慮浴室を優先して求めています。

Q. 家を建てる時、以下のケース毎の仕様はだいたい同じ費用だとして、どれを選びますか。

1から4まで各々のケースに順位をつけてください。

(※下表はケース3とケース4の集計表)

＜ケース3＞15万円をかけるとして		順位	1位	2位	3位	4位	不明
出窓(180cm幅)	2位	105	225	187	54	29	
普通の玄関ドアを豪華な木彫りに	4位	57	70	149	203	31	
段差のない床(1軒分)	1位	326	116	86	43	29	
食器洗い機(6人家族用)	3位	86	161	147	179	27	

＜ケース4＞30万円をかけるとして		順位	1位	2位	3位	4位	不明
シャワーブース	2位	46	237	209	77	31	
シャンデリア(居間)	4位	42	88	175	261	34	
普通の浴室を安全配慮浴室に	1位	433	81	45	13	28	
ホームサウナ	3位	51	163	137	216	33	

回答者属性

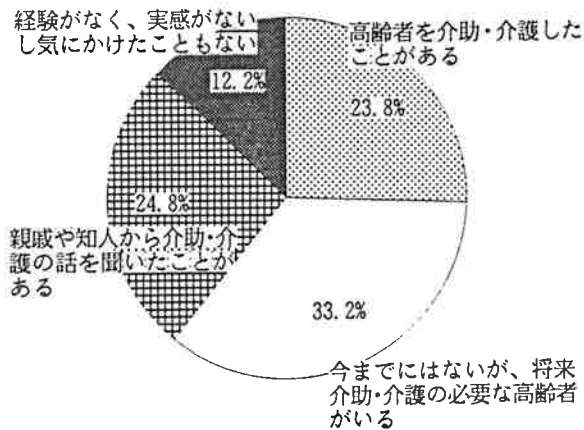
回答者の6割弱が高齢者介護を現実的な問題としている

今回の調査では、加齢配慮というテーマに即し、40歳未満及び65歳以上の回答者をできるだけ除外し実施しました。その理由は、まだ高齢者にはなっていないが、加齢のイメージを想定するいわば“加齢予備軍”といえる層を調査対象の主体としたかったためです。有効回答票の年齢別内訳は下表の通りです。40代～50代をあわせて全体の77.3%を占めています。まずはじめに高齢者介護問題について、経験の有無、住まいとの関わり方についてたずねました。高齢者の介助・介護の経験の有無は「経験あり」は23.8%と4分の1程度ですが、「将来介助・介護の必要な高齢者がいる」が33.2%あり、「加齢配慮」は、回答者の6割弱の人においてすでに身近な問題となっています。

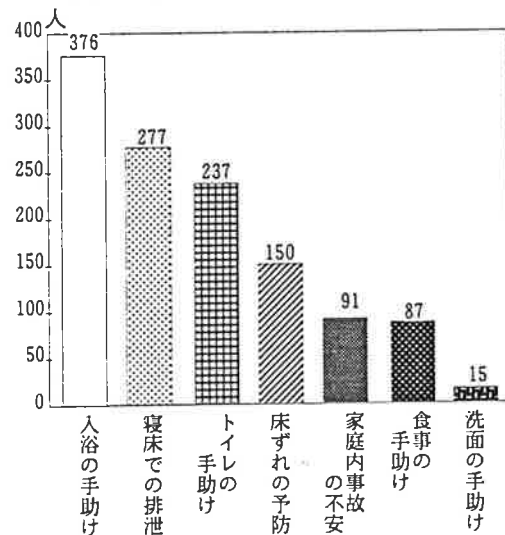
介助・介護の住宅内での心配や苦勞はどんな点があるのでしょうか。経験のない人には場面や状況を想定して答えてもらいました。1位は「入浴の手助け」で62.7%、次いで「寝床での排泄」46.2%、「トイレの手助け」39.5%、「床ずれの予防」25.0%、「家庭内事故の不安」15.2%と続いています。

回答者の年齢	N	～29	30～ 34	35～ 39	40～ 44	45～ 49	50～ 54	55～ 59	60～ 64	65～	不明
合計	600	3	7	31	134	143	109	81	56	26	10

Q. あなたは高齢者を介助・介護したことがありますか。
(○は1つ)



Q. 介助・介護の住宅内での苦勞や心配はどんな点ですか。(○は3つまで)



以上

本件に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

株式会社住環境研究所 担当：金子、栗田
☎ 03 - 3256 - 7574(代)

<参考資料> フリー・アンサー抜粋

今回のアンケートでは、フリー・アンサーとして、これからの住宅や住生活について、日ごろ考えていることを記入していただきました。600票の有効回答のうち62%に相当する374票について実態に即した“体験談”が語られており、その一部を以下に紹介します。

●加齢配慮という優しいひびき (55歳、男性)

今回のアンケートの「加齢配慮住宅」という言葉だけでも、うれしく思います。今までの住宅は健康で若い人向きの考えが多く、身体的弱者への配慮はあまりなかったようです。私の周囲に高齢で他人の介助を受けなければ生活できない方がいまして、老人ホームに入らなくても、日常生活を過せる方法はないものか、と常々考えておりました。社会も家庭も、家の造りも高齢者、心身の弱者に目線を合わせるべきだと思います。日本の住宅会社や機器メーカーも便利、清潔、妥当な価格で親しみ易い弱者への提案を沢山作って下さいますようお願いしています。

快適・安全に住みよい加齢配慮住宅を (54歳、男性)

高齢化社会と言われる昨今、住まいについては特に生活の原点であるだけに、建築時には環境はもちろんのこと、人間誰もが、いつかは年老いて身体も不自由になっていくことを直視し、その為の加齢配慮住宅、即ち快適・安全に高齢者が安心して日常住めるべき間取配置等に充分考慮した住みよい住宅の建築をと思っています。

●老人医療ホームみたいな家でなく健康に老いていきたい (52歳、女性)

77歳～80歳の間に三回も庭先、部屋等で転んで入退院を繰り返し一昨年の暮れに見送った姑の介護の経験から、これからの住居は介助が必要な障害者も快適に生活できるようすべての設備をすることが望ましいと思込んでいました。落ち着いて考えてみますといやそれはちょっと違うのではないかと思うようになりました。年々世の中が変化してきている(家族の形、子供の数、子供の親に対しての気持ち、教育、女性の社会進出、医療の進歩等…)ことを考え、老人が自分の足で家の中を歩けるくらいを最低の条件とし、転倒防止の設計、行動距離、老人の体力を考えた設計にし、車イスで生活することまで考えることはないと思います。ここ半年身近な人が60代で二人入院しています。奥さんが家と病院をせせと往復しているのを見たり、また、お話を聞くにつけ、現実をしっかりと見たうえで家の建て替えの設備等考えたいと思います。先のことは今100%推し量ることはできませんので、後からでも設置できるよう、トイレ、洗面所お風呂場等の入口を広く、廊下はゆったりと幅をとっておき、最初から老人医療ホームみたいに家全体をしてしまわないでやはり健康な時も心なごむステキな家を作りたいと思います。

●他人や機関に頼ることなく自力で (55歳、男性)

正直言って、このアンケートに記入するまでは、あまり身近なこととして考えていませんでした。これを機に改めて考えて見たいと思いました。目前の高齢化社会(自分や妻も含めて)において、他人や機関に頼ることなくできるだけ自分らの努力や設備を利用し、家を増改して配慮すべきだと痛感しました。やはり、他人のお役にたてるときは、その努力をおしまず自分のことはできるだけ自分でできるよう心がけを強く持っていたと思っています。

●床段差は重要なファクター (43歳、女性)

56年に建築した戸建てに住んでいます。最近特に気になりかけたことは段差です。洋室から和室への敷居は高さ4cm、洋室から廊下への開き戸は2cmの高さ、トイレのドアの足元は6cmの高さとぼんやりすると時としてつまづきます。それに壁際にホコリもたまります。夏場になると洋室と和室の間仕切りの襖は取り外しワンルームにします。そんな折それらの段差がなくなるともっとスッキリとした空間ができるのと思うようになりました。

●加齢配慮設計は特別なことではない (59歳、男性)

日頃、お金があつたらこういう家を建てたい、建てるべきかと思っていることは、誰でもいつかは年をとって老いていく。体力が衰えていく。その時になって改修したり、改造したりではお金がかかるし、満足いくものができないので新しく建てる時に費用がかかっても広い巾の廊下とか、段差をなくすとか、近くのトイレ・浴室(寝室から)とか合理的で計画的な家を建てるべきかと思っています。これらのことはほんの基本であつて特別なこととも思いません。

●付けておいて良かった風呂やトイレの手すり (44歳、女性)

家を建て替えた時お風呂やトイレにまで手すりはいらなかったと思いましたが、セットになっているとかでそのままつけてもらいました。3年たつてこの手すりが思いもかけず便利(腰痛になり)で大変良かったです。孫のことを考えるとお風呂場の段はあつた方がスーと入って行かず安全かと思いましたが年をとることを考えたら、なかった方が良かったのか、今でも?マークです。

●メーカーへの期待が強く (49歳、男性)

今回の質問全般について個人々が工務店に発注するには、相当な知識を必要とするため、メーカーサイドで提示することが好ましくユーザーは、選択するのみで行なった方法が簡単です。(実際私はこの方法をとりました)

●本アンケートに教えられたことは… (53歳、男性)

現在の住宅に全く満足している。何一つ不自由な点はないと考えています。しかし、本アンケートの文章を読んでも…住宅について別の見方から我が家を評価し直さなければならぬと思うようになりました。

団塊世代の終の住処は『加齢配慮住宅』

『住宅の品質が飛躍的に向上し、耐用年数も伸長したことにより、一度家を建てると、30～40年は住み続けることが十分可能になった。その間住まい手の側には、身体機能の低下や家族構成の変化などが起きてくる。このために費用が多少かかっても建築時にこうした変化に対応した基本的配慮をしておく、いざという時に大幅な改造の必要がなく、家族の誰でもが、安心、快適、健康に住み続けることが可能になり、未配慮の住宅とは大きな差が生じる。このように建築時に基本的配慮を“さりげなくほどこした”住宅を我々は“加齢配慮住宅”と呼び、どの年代の人達にとっても必要で快適な住宅として、高齢者だけを対象とした住宅とは明確に区別している。』

こうした加齢配慮住宅がどのように受け入れられるか、それも、住宅の新築や建て替えを計画している人で老化は少し先の話しと思っている人達（40代、50代）がどう考えているかが今回の調査の最大の目的であった。結果は回収率80.4%と当研究所の過去の調査（回収率20～50%台）を大幅に上回り、このテーマに対する関心度の高さを知らされることになった。関心度とともに注目されるのは、40代、50代のこれから家を建てる人にとっても『加齢配慮住宅』は必須となったことである。将来へ向けての生活設計の中で、加齢に目をそむけず、真剣に見つめようとする姿勢が予想以上に強いことが浮きぼりになった。

ただ、考え方は判るし配慮もしたいが「どの程度の配慮が基本的配慮か」、
「費用はどうか」、また「若い人には住みにくいのでは」など知識や情報不足による心配も多く、この点で、住宅メーカーの的確なアドバイスや商品提供の必要性を強く感じた。

基本的配慮である①床段差の解消、②トイレ、階段、廊下等の手すりの設置（または壁の補強）、③配慮された浴室、④廊下、出入り口の幅を広く、⑤トイレや浴室を寝室の近くになどは、建築時に実施すれば改造に較べてずっと少ない費用でできること、また施設のような配慮は必要でないことなどが理解されるようになれば、日本の住宅は「加齢配慮住宅」が常識ということになるであろう。

このためにも今回の調査の発表が活きてくれればと願っている。

株式会社 住環境研究所
所 長 金子 昌平